

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
(平成22年度～26年度)

◎展 観 日 録

平成24年4月14日(土)～5月20日(日)

関西大学 千里山キャンパス
総合図書館 1階 展示室

第3回大阪都市遺産フォーラム関連展示

織田作之助と「大阪」

ODASAKU × OSAKA



赤松麟作「高津神社」(センター所蔵)

菅 楯彦「道頓堀春宵」(センター所蔵)



織田作之助と「大阪」

（生誕一〇〇年によせて）

織田作之助の名前を知らない人でも、「夫婦善哉」は知っている。小説「木の都」を知らない人でも、上町台地の口縄坂や源聖寺坂を上り下りする途中、彼の名が記された碑を目にすることがある。その意味でオダサクは、いままも大阪に生きている。

織田は大正二年（一九一三）十月二十六日に生まれ、昭和二十二年（一九四七）一月十日、享年三十五歳で、この世を去った。「木の都」大阪に生まれ、大阪と京都で青春時代を送り、戦前から戦後にかけて、大阪に暮らす市井の人々を主人公として小説を書いた。第十回芥川賞候補作となった「俗臭」、「夫婦善哉」、「わが町」、「螢」、「六白金星」、「競馬」などの旺盛な執筆活動は、先輩作家藤沢桓夫をして「とにかく織田君は書くのが好きで、書き出したら夢中になって書くことができたというのは彼の最大の生き方やったな」（『回想の大阪文学』）と言わしめている。

「息づかいが伝わる都市遺産の検証」を目指して、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業として二〇一〇年四月に設立された大阪都市遺産研究センターでは昨年、織田の小説「六白金星」の自筆原稿を入手した。来年の生誕一〇〇年を前に、その公開をかね、第3回大阪都市遺産フォーラム関連展示「織田作之助と〈大阪〉」を開催する。大阪が生んだ「未完成の作家」織田作之助を偲ぶ機会となれば幸いである。

なお、貴重な資料の提供を受けた関西大学総合図書館、オダサク倶楽部、日本近代文学館、大阪文学振興会に對し、心からの謝意を表す。

二〇一二年四月十四日

—〈凡 例〉—

- ・本書は、平成24年4月14日～5月20日に関西大学総合図書館で開催する関西大学大阪都市遺産研究センター主催 第3回大阪都市遺産フォーラム関連展示「織田作之助と「大阪」」の展観目録である。本目録には、関西大学総合図書館・オダサク倶楽部およびセンターが所蔵する22点について写真と解説を収録した。
- ・本書は、増田周子（センター研究員・文学部教授）が監修し、櫻木潤（センター特任研究員）・岩田陽子（センターRA）が編集・執筆した。

1 『高津中学卒業写真アルバム』

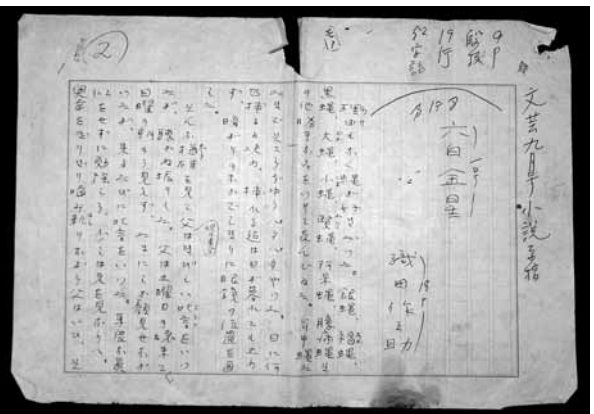
(三原写真館本館 昭和六年三月)



織田作之助が高津中学校（現・府立高津高等学校）を卒業した年の記念アルバム。同級生には『海風』の同人で、第二十三回直木賞候補になった吉井栄治や藤澤黄坡の息子斐夫あやおがいる。アルバムは斐夫の兄で作家の藤澤桓夫たけおより、関西大学に寄贈され、「泊園文庫」に所蔵されている。当時の織田作之助は、毎朝遅刻し教練は最下位であったが、英語は最も得意で学科はよくできた、と吉井栄治が「中学時代の思い出」として語っている。

2 『六白金星』

(自筆原稿 三十六枚)



平成二十年、八木書店古書部（神保町）から「六白金星」の原稿が発見された。現在、関西大学大阪都市遺産センターが所蔵している。

本原稿は昭和二十一年三月一日に、『新生』から発表された「六白金星」とは内容が異なっている。三十七枚目以降は散逸。原稿の一枚目には赤色のペン書きで「文芸九月号小説原稿」とある。

織田作之助は杉山平一宛の葉書（昭和十五年八月二十四日）で、『文芸』のオール創作号にのる

筈だったが、削除された。(同誌のノンブルが飛んでいるのはそこにぼくのがあったわけ) 検閲の点で今までの行方はいけないことになり、いま新年を考えている」と述べていた。織田作之助がいうように、昭和十五年に発行された『文芸』九月号の頁数は百二十九頁から百六十二頁が飛んでいる。

これまで、織田作之助がいう「『文芸』のオーラル創作号にのる筈だった」作品が特定できず、「続夫婦善哉」であったのではないかと考えられてきた。しかし、『六白金星』の原稿が発見され、「文芸九月号小説原稿」であることが明らかになったため、発禁処分となり、『文芸』九月号に掲載されなかった作品が「六白金星」であると確定した。



『文芸』昭和15年9月号目次

3 『夫婦善哉』

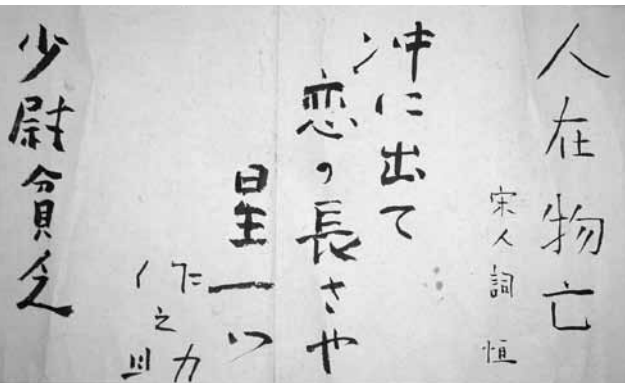
(初版本 創元社 昭和十五年八月十五日)



装丁・田村孝之介、題字・藤澤桓夫。「夫婦善哉」
「放浪」「俗臭」「雨」「探し人」「あとがき」が収録。
織田作之助にとっての第一作品集である。「夫婦
善哉」は改造社の第一回文芸推薦を受賞(選考委
員・宇野浩二・青野季吉・川端康成・武田麟太郎)
した作品であるが、高見順から「とっちゃん小僧」
「滑稽であり、いやなもの」と評された。「大阪的
なもの、東京の評家の神経」にふれたのではな
いか、と宮内寒彌は述べている。

4 『長沖一出征記念寄書』

(自筆 縦二十四・五cm 横百五十三cm)



昭和十六年七月、第一回応召で長沖一が出征する前に、吉正郎（吉村正一郎）、義、凡（白石凡）、恒（大久保恒次）、作之助（織田作之助）、廣（秋田実）、留（吉田留三郎）、桓（藤澤桓夫）、孝（田村孝之介）が寄せ書きしたもの。織田作之助は「沖に出て／恋の長さや／星一つ」というように、「沖」「長」「一」をつかい、「長沖一」のことを詠みこんでいる。

5 『船』

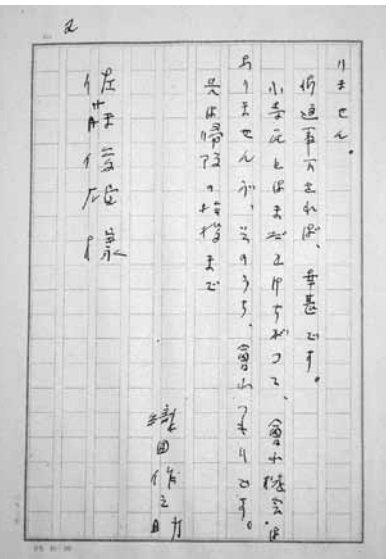
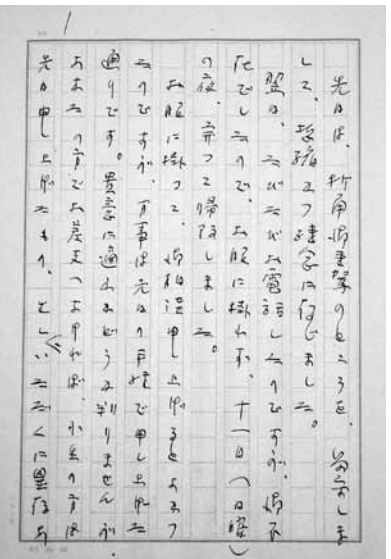
(自筆原稿 二十枚)



昭和十七年執筆された生前未発表作品である。難破した船の船員たちが、五年後にやってくる船を空しく待つよりは、と自分たちの手で船を作り始めたことで運命が開けていったという短篇小説。『定本織田作之助全集』に収録されている「船」とほぼ同一の内容である。

6 書簡 佐藤俊雄宛

(自筆 封筒付 昭和十八年四月十三日消印)



織田作之助が佐藤俊雄（昭南書房）に宛て、「先日申し上げたもの、出していただくに異存ありません」と書いている。昭南書房から織田作之助関連の出版物を発行する計画があったとみられる。

7 『わが町』

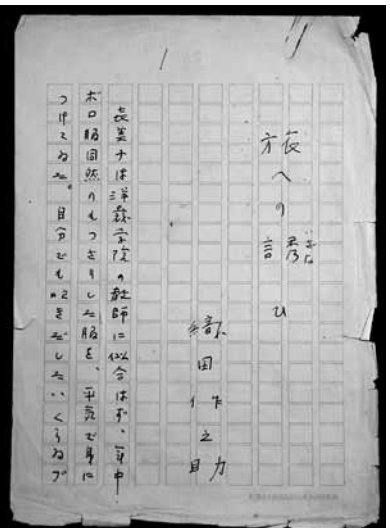
(初版本) 錦城出版社 昭和十八年四月三十日)



装丁・田村孝之介。表題作「わが町」は『文芸』(昭和十七年十一月一日)に発表された。「後記」によれば、溝口健二監督の映画の原作として松竹京都撮影所の委嘱にもとづいて書かれた作品であるが、織田作之助の生前、映画化は実現しなかった。「わが町」は昭和三十一年八月二十八日、日活で封切られた。監督は川島雄三、脚本・八住利雄、出演・辰巳柳太郎、南田洋子。

8 『旅への誘ひ』

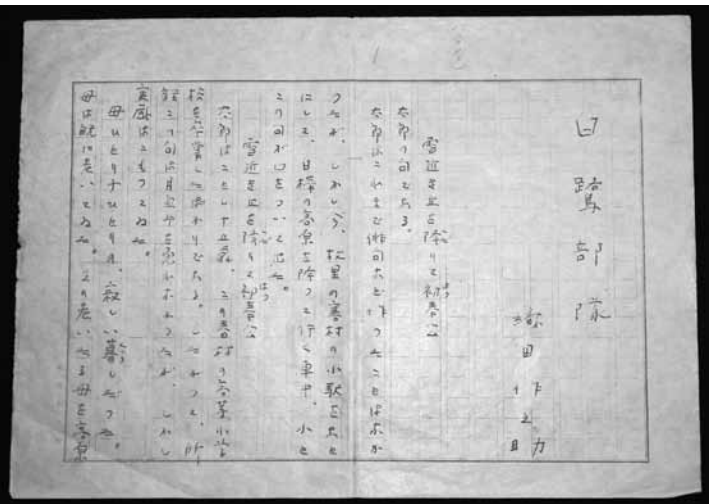
(自筆原稿 三十二枚)



妹道子が姉の過労死をきっかけに、旅へ誘われていく短篇小説。昭和十八年十一月、雑誌『令女界』に発表された「姉妹」の原型ではないかと考えられている。

9 『白鷺部隊』

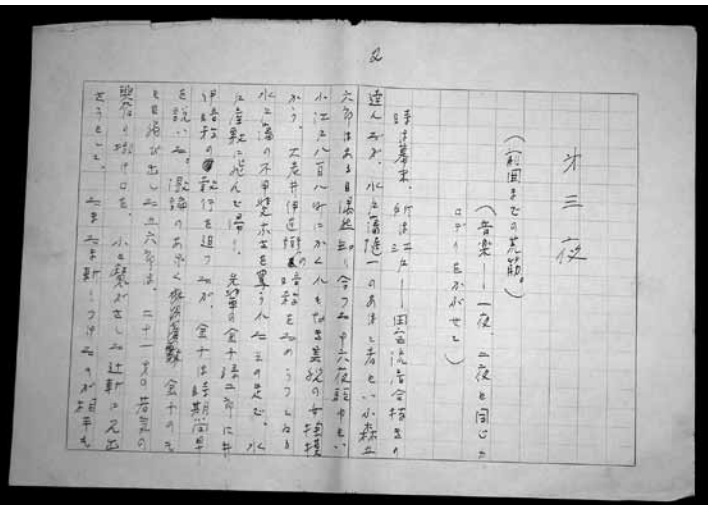
(自筆原稿 十三枚)



昭和十九年四月三十日、『新創作』に発表された短篇小説。織田作之助は「放送局の依頼により大阪普通海員養成所の現地録音の解説を兼ねた物語として執筆された台本を改作した」としている。織田作之助と印刷された原稿用紙が使用されている。

10 『十六夜頭巾 第三夜』

(自筆原稿 三十三枚)



NHK大阪放送局から、昭和二十年六月十四日、十六日、十七日の三夜にわたって放送されたラジオドラマ。井伊直弼の暗殺に美貌の十六夜頭巾が活躍するという娯楽作品。織田作之助は吉川民宛ての書簡の中で「もつとも真剣に書かなかった作の一例」としている。

11 『夢想判官 第一——二夜』

(自筆原稿 第一夜・三十八枚 第二夜・三十八枚)



ラジオ連続放送劇。織田作之助は杉山平一宛ての書簡で「ドンキホーテまがいのドラマ」「一寸高邁なものにするつもり」としていた。NHK大阪放送局のために執筆されたが放送されなかった。その後、ラジオ脚本をもとにした「十五夜物語」が『大阪新聞』に連載された。

12 『瀬戸内海』

(自筆原稿 七十二枚)



昭和二十一年三月四日、NHK大阪中央放送局から放送されたといわれるが、その記録は残っていない。一枚目が散逸している。驚くべき逞しい空想力を持ったインテリ男、源次郎が主人公。源次郎が私立探偵になって、架空の犯人が船で逃亡するのを追跡するという物語である。「大阪新聞出版局」と印刷された二百字詰原稿用紙が使用されているが、五十九枚目よりは茶色の罫のみの二百字詰用紙が使用されている。

13 『六白金星』

(初版本 三島書房 昭和二十一年九月三十日)



装丁・鍋井克之。「六白金星」「髪」「表彰」「道なき道」「訪問客」「神経」「あとがき」を収録。「あとがき」に『六白金星』―『新生』から依頼されて、昭和二十年の大晦日から書き出して、正月三日に脱稿した。『六白金星』といふ題で、同じやうな材料を、私は昭和十五年に書いたが、当時発表を許されなかつた」とある。

表題作「六白金星」は昭和二十一年三月一日に、『新生』から発表された。田宮虎彦は「六白金星」と「競馬」について「面白さをいへば、この両作

は敗戦後の小説数多い中でも随一」であるが、「この面白さには真実への誠実さが無い」（『人間』昭和二十一年五月一日）と評している。

VITA NOVA
生新
 三 月 號

文化革命とヒュムナムズム——務整理作(2)
 民主戦線の結成とその方向——無 冥 宇(2)
 企業資本と天皇制——戸田 碩太郎(2)
 天皇の御心と憲法と制定と——上杉 肇二郎(2)
 日本産業人への忠言——バートン・ウレン(3)
 財産税と金融資本と日銀——松本 俊朗(3)
 永井荷風の新作——正宗白鳥(3)
 古物太夫一夕話(3)——茶谷牛次郎(3)
 東大回顧(演習山田)——辰野 隆(3)
 小しらみ 織 海——川崎長太郎(3)
 戦 災 日 録——永井荷風(5)
 詩二篇(新田) 〇 海外短説(3) 〇 編輯後記(3)

新 生 社 行 發 社 新
 東京 丸の内 三丁目 五番 五号
 電話 五五九七

六白金星
 織田作之助

この小説は、戦時中、作者が戦地から持ち帰った手紙を基に、戦時下の日本人の生活と心を描いたものである。主人公は、戦時下の日本に生きる一人の青年であり、戦時下の生活と戦時下の心を描いたものである。

戦時下の生活と戦時下の心を描いたものである。主人公は、戦時下の日本に生きる一人の青年であり、戦時下の生活と戦時下の心を描いたものである。

戦時下の生活と戦時下の心を描いたものである。主人公は、戦時下の日本に生きる一人の青年であり、戦時下の生活と戦時下の心を描いたものである。

14 『見世物』

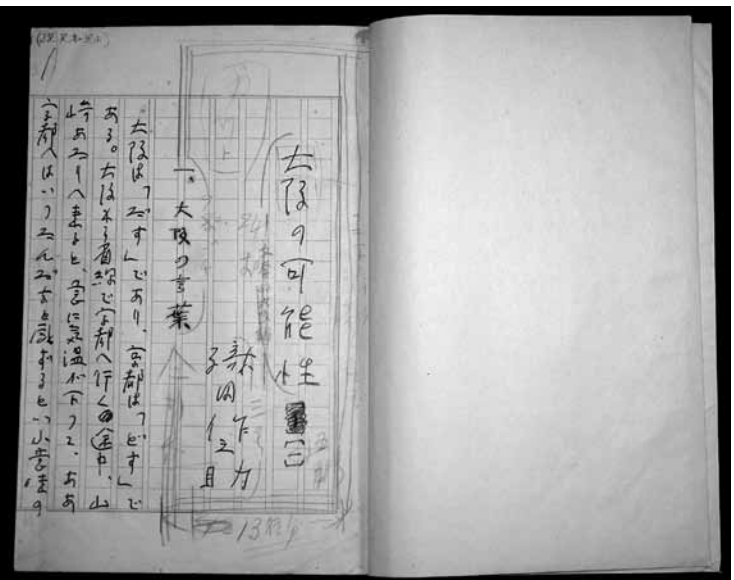
(自筆原稿 二十一枚)



昭和二十一年十月一日、『新世界』に発表された短篇小説の原稿。最終部分の二十一枚目には、「新世界編集部」と朱の角印が押されている。『織田作之助全集』に収録されている「見世物」と同一の内容。大阪府立中之島図書館の「ろくろ首」は「見世物」の草稿と思われる。

15 『大阪の可能性』

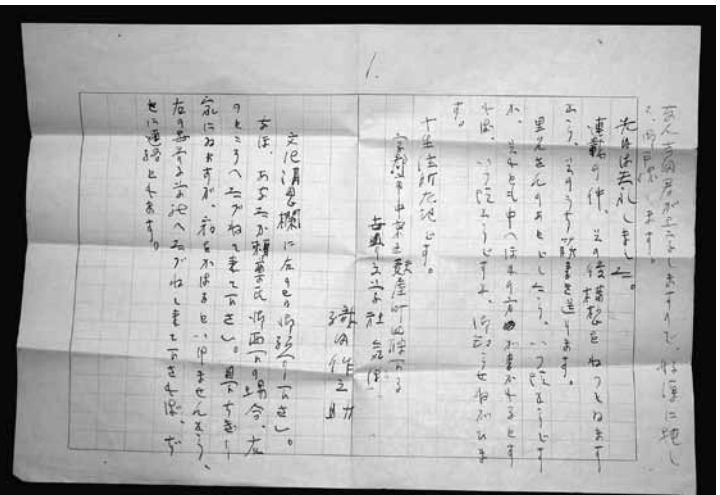
(自筆原稿 二十一枚)



昭和二十二年一月一日に『新生』に発表されたエッセイのペン書原稿。昭和二十二年八月三十日に発行された『可能性の文学』に収録された。大阪弁について、谷崎潤一郎や宇野浩二の作品の批評を交え語っている。

16 書簡 宮川宛

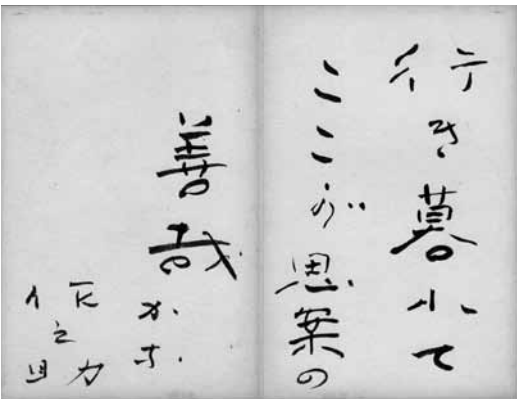
(自筆 封筒付)



織田作之助が上京する「吉田」に託した宮川（東京新聞文化部長）宛ての手紙。原稿用紙二枚に記されている。「世相」と舞踏会の手帖のスタイルとが混じったストーリーを、新連載では予定しているといった内容である。

17 『星欄干』

(オダサク倶楽部所蔵)

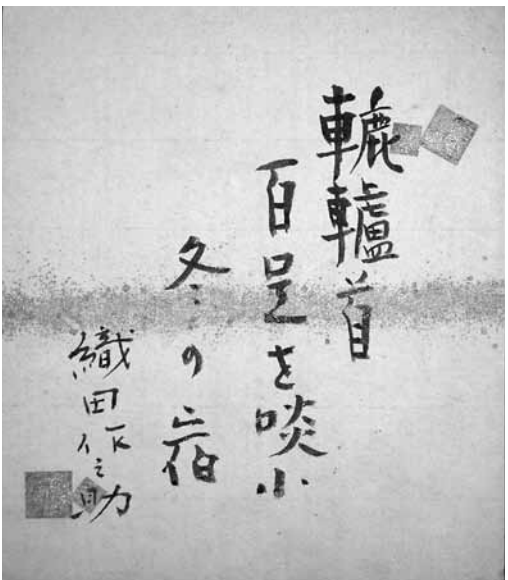


昨年七月に、藤澤桓夫の書斎西華山房より発見された浅沢句会の句帖。「行き暮れて　ここが思案の　善哉かな　作之助」とある。浅沢句会は藤澤桓夫が離れに寓居していた石濱純太郎邸で、石濱恭子らによって、昭和十二年頃から始められた。昭和十五年三月頃から藤澤桓夫に頻繁に会いに来ていた織田作之助も参加し、作之助または丈六の俳号で作句していた。

この句帖は藤澤桓夫と永尾宗斤が宗匠格で催していたもので、昭和十六年秋頃と思われる。二十人が記帳しており、庄野英二の一句もある。

18 色紙

(縦二十一・〇cm 横十八・〇cm)



「轆轤首百足を啖ふ冬の宿 織田作之助」とある。「猿飛佐助」(昭和二十一年一月三十日、三島書房)に「冬の宿の轆轤首が油づけの百足をくらくくらしいの趣きがあるう」という比喻表現がみられる。

19 『文学雑誌』 織田作之助追悼

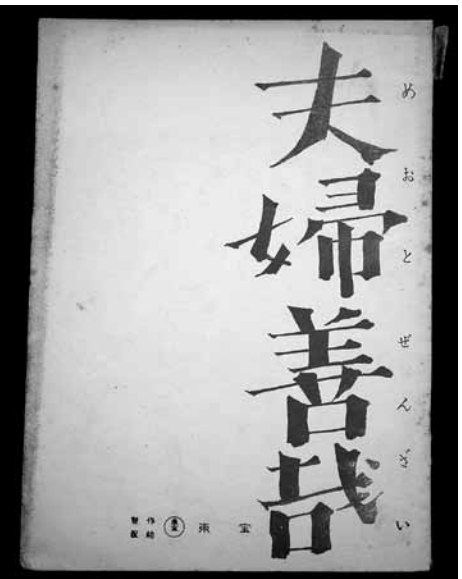
(昭和二十二年五月十五日、第一卷第三号)



昭和二十一年十二月二十日、藤澤桓夫は中心となり大阪で創刊された同人誌。織田作之助も初刊号より執筆している。昭和二十二年五月には死去した織田作之助を追悼した特集がなされ、故人の思い出が語られた。執筆者に吉村正一郎、杉山平一、白川渥、長沖一、安西冬衛字、小野十三郎、瀬川健一郎、藤澤桓夫、吉井栄治、吉田留三郎がいる。

20 八住利雄脚本『夫婦善哉』

(東宝映画台本)



八住利雄は昭和三十年「夫婦善哉」や「浮草日記」のシナリオで、毎日新聞コンクール脚本賞を受賞。「賞をもらってしまったので、これからは今までみたいは無茶な仕事ができなくなりました」と述べている。東宝映画「夫婦善哉」は、監督・豊田四郎、主演・森繁久弥、淡島千景。同年九月十三日に封切られた。井沢淳(映画評論家)は、今年度の日本映画のなかで「ベストワンにしてもいいもの」と評価している。

21 若尾徳平脚本『忘れじの人』

(東宝映画台本)



織田作之助の「船場の女」「女の橋」「大阪の女」が原作の映画脚本。監督は杉江敏男、出演・岸恵子、小泉博。昭和三十年十月十八日に公開された。織田作之助自身も松竹から映画化の話があり、昭和二十一年、「船場の娘」を映画脚本に直していたが、実現しなかった。「中村芳子、高田浩吉、田中絹代といった大阪弁の使える役者でやる」と青山光二宛の書簡の中で述べている。

22 法善寺横丁・正弁丹吾亭前句碑

除幕式

(オダサク倶楽部所蔵)



織田作之助の十七回忌を記念して、藤澤桓夫・長沖一・前田藤四郎らが発起人となり、昭和三十九年一月十日の命日に、法善寺横丁正弁丹吾亭前に句碑が建立された。碑文は、長身の織田作之助を彷彿とさせる細長い自然石に、『星欄干』(17)から「行き暮れて　ここが思案の　善哉かな　作之助」という一句がそのまま写されている。



織田作之助略年譜

大正二年（一九一三）

十月二十六日、大阪市天王寺区上汐町に、父織田鶴吉、母たかゑの長男として生まれた。

大正九年（一九二〇）

七歳

四月、大阪市立東平野第一尋常高等小学校（現、市立生国魂小学校）に入学。

大正十五年・昭和元年（一九二六）

十三歳

三月、小学校を卒業。四月、大阪府立高津中学校（現、府立高津高等学校）に入学。

昭和三年（一九二八）

十五歳

廻覧雑誌「燦蹄《さんてい》」を主宰した。三年D組にぞくしていたことから、三Dをもじったもの。

昭和五年（一九三〇）

十七歳

同級の吉井栄治とともに、校内の修養会に反撥していたが、学科の成績は優秀で、特に英語、国語にすぐれていた。十二月、母たかゑを喪う。

昭和六年（一九三一）

十八歳

三月、高津中学校を卒業。四月、第三高等学校文科甲類に入学。寮で田宮虎彦と同室となる。

昭和七年（一九三二）

十九歳

同級生白崎礼三や瀬川健一郎との親交により、文学的開眼の契機をつかむ。九月、父鶴吉を喪う。

昭和九年（一九三四）

二十一歳

三高近くの横丁にある酒場ハイデルベルクにつとめる宮田一枝と知りあい、同棲。

昭和十一年（一九三六）

二十三歳

三月、三度目の卒業試験をうけたが、出席日数が足りず退学。翌年、劇作勉強のため東京へ。

昭和十四年（一九三九） 二十六歳

四月頃、東京生活をきりあげ、富田林の義兄竹中国次郎方に寄寓。日本工業新聞社に入社。七月、宮田一枝と正式に結婚、大阪府南河内郡野田村丈六に家庭を構えた。

昭和十五年（一九四〇） 二十七歳

二月、「俗臭」が芥川賞落選。七月、「夫婦善哉」が改造社の第一回文芸推薦を受賞。八月、『夫婦善哉』を刊行。日本工業新聞社を辞職、筆一本の作家生活に入る。「六白金星」が発禁処分となる。

昭和十六年（一九四一） 二十八歳

秋、『青春の逆説』が発禁処分。時代は、文芸にも戦争協力を強いる風潮となり、新たな作風の展開をこころみようと考えはじめた。

昭和十九年（一九四四） 三十一歳

自ら脚色した「還つて来た男」が松竹で映画化。八月六日、妻一枝が死去。東劇で上演された「わが町」出演中の輪島昭子と知りあい、やがて同棲関係となる。

昭和二十年（一九四五） 三十二歳

連続放送劇「猿飛佐助」、「十六夜頭巾」がNHK大阪中央放送局から放送。

昭和二十一年（一九四六） 三十三歳

二月、声楽家笹田和子と結婚するも、輪島昭子と旅館を転々とする。「可能性の文学」を書きあげた四日夜、大量の咯血をし、病勢は、しだいに悪化。「土曜夫人」は未完。

昭和二十二年（一九四七）

一月「大阪の可能性」を『新生』に発表、対談「可能性の文学」を『世界文学』に載せる。十日午後七時十分、輪島昭子にみとられつつ永眠。

参考 青山光二「織田作之助年譜」（『定本織田作之助全集 第八巻』昭和五十一年四月二十五日、文泉堂書店）



法善寺横丁・正弁丹吾亭前の句碑

関西大学 大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

TEL : 06-6368-0095

FAX : 06-6368-0092

E-mail : osaka-toshi@ml.kandai.jp